

## JOMF 派遣医師便り (2018. 7)

### ◆シンガポール◆

### 成人の予防接種

シンガポール日本人会クリニック

日暮 浩実

シンガポール保健省は、このほど、18 歳以上の国民・永住権保持者が受けるべき予防接種の一覧<sup>※1</sup> “NAIS, National Adult Immunisation Schedule “のプレスリリースを行った。実はこの一覧は、既に昨年9月に医療関係者に広報され、事実上の運用は、これらのワクチンの費用に対し Medisave <sup>※2</sup> が使用できることになった2017年11月から始まっていたのであるが、その利用があまり進んでいないことから、今一度、広報するため今回のプレスリリースとなったようである。

大人へのワクチンの普及の動きは急速に進むこの国の高齢化と無縁ではないであろう。シンガポールの65歳以上人口の割合は現在、12%ほどであるが、2030年までには倍増し25%に達するという。

高齢になればなるほど、様々な疾患のリスクが高まり、健康が脅かされる。一つの疾患が他の疾患の契機となることも起こりやすくなる。例えば、口腔内疾患から血行性に細菌が心臓に達し、心内膜炎を起こし、長期入院臥床となれば、フレイルとなり、さらにうつ、認知症を発症することもある。すると、家族の肉体的、精神的負担、家族・社会の経済的負担も増えるといった具合である。

加齢は避けられないし、避け難い疾患も多い。だが、いくつかの疾患（感染症）は、ワクチンで予防できる。全ての年代の人が免疫を持つことにより、その病原体が流行しにくくなる。

シンガポールの大人への予防接種の勧めは、たとえ、その効果が限定的であったとしても、やれることからやろうとする至極現実的な方策であるといえる。また、おそらく、ワクチンで予防した方が、実際に病気になってから治療するより、個人・国家として直接・間接の医療負担が少なくすみ、ひいては、国としての経済力、活力へのマイナスの影響も少なくすむといった計算もあるのであろう。もちろん、先に高齢化した日本その他の先進国を研究した結果であることも疑いない。

日本でも65歳以上の高齢者への肺炎球菌ワクチンが、ようやく普及しつつある。政府からではないものの、日本プライマリ・ケア連合学会から「おとなのワクチン接種スケジュール」が発表されている。日本は既に65歳以上人口がおおよそ27%を占める老人国であり、も

っと早くにこうしたものがあつたらとも思うが、今からでもやれることは行って行くべきであろうと思う。

成人が予防接種を受けることにより、自身の健康を守り、同時に家族、集団を病原体から守ることに役立ち、しかも、医療費の削減につながるとしたら、それは大変素晴らしいことであると思う。こうしたことは、皆、頭ではわかっているのだが、現在、元気な人が、時間を作ってワクチンを受けに行くという行動を起こすのは、容易なことではないのが現実であるので、医療者は機会を見つけて、啓発していく必要があると思う。

註1 基本的に当該の病原体に免疫がないと考えられる人が対象である。対象となるワクチンは次のとおりである。インフルエンザ、肺炎球菌（プレベナー13、ニューモバックス）、子宮頸がん、Tdap（破傷風・ジフテリア・百日咳）、MMR（麻疹・おたふく風邪・風疹）、B型肝炎、水疱瘡。ちなみに今回の薦めには入っていないが、水疱瘡の原因ウイルスと同じウイルスにより起こる帯状疱疹（80歳までに3人に一人が発症するとされる）を予防するワクチンには2種類、zostavax(2006年)とshingrix(2017年)がある。シンガポールでも50歳以上（特に60歳以上に推奨）の方に接種することが可能であるが、アメリカのCDCではshingrix(0, 2-6月後)がより効果が高いとしている。

註2 シンガポールには、自身の給与から毎月一定額を強制的に積み立てるCPFという制度があるが、Medisaveはその一部で、医療目的として積み立てたものである。但し、使える疾患はいくつか(15ほど)の慢性疾患や精神疾患、入院の費用などに限定され、使用可能な金額にも上限がある。例えば、風邪で医療機関を受診してもその費用に充てることはできない。